

ヴィーラント『アガトン物語』試論 —交錯する前近代と近代の小説像—

北原 寛子

1. はじめに

『アガトン物語』*Geschichte des Agathon*¹は、クリストフ・マルティン・ヴィーラント(1733-1813)による長編小説で、第一版が1766年から翌年にかけて発表された。デルフォイのアポロン神殿で育てられた美しくかっこいい青年アガトンを中心に、彼が出会うさまざまな人々とのあいだで引き起こされる出来事をめぐって物語が展開する。

この作品に関する研究は、二つのテーマに大別することができる。一つは18世紀の小説理論、小説技法の問題と関連付けて論じたものであり、ⁱⁱもう一方は18世紀後半の精神文化の観点から作品を分析するものである。ⁱⁱⁱこの小説は古代ギリシャを舞台としているが、いずれの研究テーマであっても、多くの場合18世紀後半という作品が成立した時代と密接に関連付けられて論じられることが多い。時代を超えて人々に受け入れられることがなかったという作品の限界を示す一方で、当時の文学と文化をめぐる状況を多方面で反映しており、それだけに今日にいたって一層の関心を集めているといえる。

こうした研究状況にあって、本論は『アガトン物語』の小説理論上の位置づけについて、あらためて考察するものである。この作品を当時の文学理論と関連づけて考察する研究では、新しい見解を提示するのではなく、従来の説を再確認するものとなっている。その従来の説とは、『アガトン物語』はドイツ近代小説の出発点となっているというものである。^{iv}従来の研究ではこの作品の新鮮さに注目するあまり、結果的にそれ以前の伝統との断絶を強調することにつながってしまっていた。18世紀中期以前のバロック文学の特徴を色濃く反映している小説は、通俗的な内容と大げさな展開のために、当時のドイツにおいても現在の文学史においても低く評価されてきた。そのためそうした作品と『アガトン物語』を区別しようとして、小説文化の継承を否定的にとらえる傾向が強まったと推測される。だがバロック的な小説も、個々の作品の完成度はともあれ、散文による文芸作品の伝統を形成し後の時代の先駆となったのだから、それにふさわしい評価をうけるべきであろう。『アガトン物語』には、前近代的な小説群から継続する要素が大きな比重を占めている。本論は、これまで注目されてこなかった『アガトン物語』における前近代的な要素についてあらためて考察するものである。そしてその上で新しい時代の小説像の萌芽を確認し、この作品の質的な豊かさについて、あるいはドイツの散文文学史において担う役割について検討していきたい。

『アガトン物語』には三つの版がある。1766/67年の第一版を基本に、1773年に第一版の結末部分に若干加筆された第二版が出された。1794年の最終版では、第一版をもとに加筆・省略がおこなわれている。そこで今回の研究では、第一版のテキストを中心に、適宜第二版と第三版によるテキストの変更箇所を参照していくものとする。

2. レッシングの批評が『アガトン物語』受容にあたえた影響

『アガトン物語』についての先行研究で主流を占める意見は、この作品とそれ以前の小説の伝統との断絶を強調している。しかしこの説は作品そのものに起因するではなく別のテキストを根拠としているために、十分注意して扱わなければ作品解釈を歪曲するおそれがある。この小説の受容に大きな影響をあたえたテキストとは、レッシングの『ハンブルク演劇論』の一節である。第69日（1767年12月29日）の記述の一部で、国民性と演劇作品の関連がこの日の中心的なテーマとなっている。まずスペインの状況について論じられ、それに続けて以下のようにドイツに話題が転じている。

もし主人公が活躍する笑劇の場合に偉大な作品と卑小な作品を、つまりオリジナルなもの
と模倣されたものを比較したならばどうなるのだろうか（議論の余地なくわれわれの時代の
なかで最も優れた作品に数えられるが、ドイツの観客にはあまりにも早く書かれたように思
われるある作品を基にして、私はこの比較を楽しんで書いてみることにしよう。フランス
やイギリスだったならば、その作品は並外れた名声を得たことだろう。編者の名は、皆の口
に上ったことだろう。しかしわれわれのところではどうだろうか。私たちにはそれがある、
それでよしとしている。われわれのなかで立派なものたちは、まず***を咀嚼することを学
んでいる。たしかに、フランス小説からにじみ出る汁のほうが好ましく、消化によいだろう。
もし彼らの歯が丈夫になって胃が強くなったら、そして彼らがそうする間にドイツ語を身に
付けたなら、そうしたら彼らもきっとたどりつくだろう、『アガトン』に。これが私の話題に
している作品である。私がこの作品をどんなにか賛嘆しているかを、もっとふさわしい箇所
でよりは、そして全然言及しないよりは、むしろここで話題にしたい。というのも、私はと
ても訝しく思いながら、芸術批評家たちがこの作品についてじっと沈黙をとおしたり、冷た
く無関心な調子でこの作品について語ったりしているのを見ているからである。これは古典
的なものを好む思考する頭脳にとって、最初にして唯一の小説である。②小説だって？それ
にこの肩書きをつけるのは、おそらく、それによってより多くの読者の手に渡るであろうか
らである。それによって失われかもしれないわずかな読者には、いずれにしても何も与える
ものがないのだ。v [下線と番号は引用者による]

この箇所、レッシングが『アガトン物語』を非常に高く評価していたことがわかる。この作
品を小説というジャンルに含める理由として、おそらくより多くの読者の手に渡るであろうから
と述べているところから、レッシングは小説というジャンルについて、多くの人々に好んで読ま
れてはいるが、積極的に評価できるものではないと考えていたことが容易に推測できる。『アガ
トン物語』はそうした一般の小説とは一線を画しており、「古典的なものを好む思考する頭脳」に
たいしても魅力的であるという。古典的なものを好み、思考する頭脳とは、知識層の人々を指し
ている。レッシングは、この作品がもしイギリスやフランスに登場していたならば、より高い評
価を得ていたであろうと嘆いてみせることで、ドイツ国内での評価が不当に低い状況への不満を
言外にあらわしているのである。viこの箇所注目すべきは、下線部①の「ドイツの観客にとって
登場するのが早すぎた」の「早すぎた」noch viel zu frühや、下線部②の「最初にして唯一」
erst und einzigという形容である。これらは字義通りに、ドイツにおけるまったく初めて創作さ

れた小説という意味ではないことは明白である。いろいろ小説作品があるなかで『アガトン物語』が格段に優れているということ強調するために、これらの語が用いられていることをここでは確認しておきたい。

このレッシングによるアガトン評は、当時のこの作品にたいする評価のうち肯定的な場合に影響を与えている。その例として、1774年に発表されたブランケンブルクの『小説試論』Versuch über den Romanを挙げることができる。この著作は、ドイツにおける本格的な小説理論の草分けであり、これから来るべき時代の新しい小説像を模索する試みでもある。そのなかでブランケンブルクは、フィールドングの『トム・ジョーンズ』とヴィーラントの『アガトン物語』以外に読む価値のある小説はまだほとんどないと記しており^{vi}、『アガトン物語』に今後のドイツの小説がみならうべき模範的な価値を認め、特別に高い地位を与えている。その評価には次のようにレッシングの影響を明白に認めることができるのである。

そしまたなお、若い女性たちが反対のことを、つまり真実と彼女たちの感受性の形成するすべを学ぶことができる小説は、まだわずかしか書かれていない。もし彼女たちが理解できたとするならば、アガトンからはたしかに彼女たちはそうすることができるだろう。その第二版は、ドイツには書かれるのがあまりにも早すぎたというレッシングの主張への反対意見を、いまだなお証明していない。^{vii}

ここでの「ドイツには早く書かれすぎたというレッシングの主張」という箇所は、レッシングから引用した先の下線部①を受けている。ただし、レッシングが「ドイツの観客には」としている部分を、ブランケンブルクは「ドイツには」へと変更している。さらに『小説試論』における以下の箇所、「お払い箱になったものの数は本当に多いので、レッシング氏がアガトンについて語ったように、古典的な趣味を持つ人に読まれるに値する作品はごくわずかしか残らないことだろう」^{viii}では、レッシングからの引用下線部②「これは古典的なものを好む思考する頭脳にとって、最初にして唯一の小説である」を具体的に念頭においていることがわかる。レッシングとブランケンブルクのテキスト間では、これらの表現が指し示す内容に本質的な違いは見られない。なぜこの微妙な表現の違いに着目したのかというと、相前後するテキストで表現のわずかな変化が許容されるがために、ブランケンブルクのテキストが第三、第四のテキストに引き継がれた場合に、最初のテキストが意図したことと完全に異なる文脈へと変化する可能性を含んでいるからである。ブランケンブルクのテキストには、「最初にして唯一」erst und einzigという語は直接使われていないが、下線部②を指し示していることは明らかである。レッシングによる『アガトン物語』評の影響が、当時のイギリスにおけるこの小説の批判記事にも見られるという研究があり^{ix}、また現代の研究においても、「彼 [=ヴィーラント] は実際に、ドイツ語による初めての近代的な小説を書いたのだ」^xという表現に見られるように、レッシングの批評をとおして『アガトン物語』を評価する現象が続いているのである。「最初」erstという形容は、そこが出来事の基点となっていることを意味する。そのことによって、それ以前との関係が断絶されていることを言外に含むことになる。だがこれはあくまで表面的なことばから派生したイメージである。レッシングやブランケンブルクは、『アガトン物語』と比べて完成度が高く読む価値のある小説は他にないと主張したのであり、作品が優れていることを強調しているのである。実際に『アガトン物語』が新しい時代の小説像を革命的に提示しているわけではない。レッシングの評価が的をえており、同時代

はもとよりわれわれの時代にいたるまで大きなインパクトを与えていることはたしかである。だからとはいえ『アガトン物語』が近代的な小説であり、それ以前の小説の伝統を排斥することによって誕生したという考え方は、文学史のありうるべき本来の姿をゆがめてしまうことにつながりかねない。むしろ『アガトン物語』のテキストからは、前近代小説の伝統が蓄積されることによって生み出された豊かさがあり、それは作品の随所に読み取ることができるのである。次に、『アガトン物語』が前近代的な小説の姿を継承しつつ、近代小説へと移行する過程にあることを、この小説を具体的に分析することによって確認してみたい。

3. 前近代の小説像

前近代的な小説の特徴とは何かと問うならば、第一に、急速な筋の展開と現実にはありえそうにもない極端な出来事が次々に起こることが挙げられる。前近代的小説、とりわけバロック小説に顕著にみられる特徴は、偶然と大事件の羅列による論理が飛躍した展開である。そうすると近代的な小説にはこれとは反対に、筋を合理的に展開させ、作品内で起こることも現実的なことがらが中心となり、非現実的であっても説得力のある理由を与えられていなければならないということになる。『アガトン物語』には、その両方がそれぞれの長所が保たれつつ混在している。

ブランケンブルクは彼の小説理論書において、運命の偶然を理由にして、前後のエピソードが飛躍する小説を非難していた。彼は小説における本当らしさ *Wahrscheinlichkeit* の質が向上して、ありえるような合理性を備えていなければ信じようがないとも主張している。彼が求めた理想の小説には、エピソード相互の合理的な関連によってもたらされる作品全体の構成美が備わっているはずであった。ブランケンブルクに限らず18世紀後半の小説批判の多くは、この点を問題にしている。当時の小説技法はバロック小説の流れを汲んでおり、書簡体や登場人物による一人称の身の上話を記述したスタイルが中心であった。作品全体がエピソードの有機的な関連によって構成されている19世紀以降の近代的な小説とは異なり、シュナーベルの『フェルゼンブルク島』(1731) やゲラートの『スウェーデンのG伯爵夫人の生涯』(1747) などのように、一つのエピソードが終了すると矢継ぎ早に次の事件が起こり、関連の薄いエピソードが並べられて全体が構成されていた。18世紀半ばの小説の技法は、大げさなエピソードを組み合わせることによって、読者を過剰に刺激することが中心であった。

『アガトン物語』では、一部ではたしかに心理を絡めた因果に基づいて筋が進行するが、しかしバロック的な筋をすべて放棄しているわけではない。大枠ではおおげさな物語の展開が認められる。主人公アガトンは、デルフォイのアポロン神殿で神官となるべく育てられ、恋人プシュケと清らかな愛をはぐくんでいた。ところがアガトンに好意を抱いた巫女の横恋慕によりプシュケは神殿から姿を消した。アガトンは彼女を探して、長年過ごした神殿を去り旅に出た。その後アテネで父親に偶然再会し、政治の世界で頭角を現すが、周囲の嫉妬によってアテネにもいられなくなり、旅に出た。冒頭はその旅の途上のである。アガトンは、盗賊団に襲われて奴隷にされ(26f.)、小アジアのスミルナでソフィストとして生計を立てるヒッピアスに買い取られる(44)。ヒッピアスの計略によって遊女ダナエと恋愛関係になるが(112)、逆にダナエがアガトンを本気で愛したことをヒッピアスにねたまれ、彼にダナエのもとを去るように仕組まれる(326)。シチリアでの執政と政治への幻滅などを経て、アガトンは知人アルキタスの家に身を寄せるが、そこ

でアルキタスの息子の嫁として現われたのが彼の前から姿を消したプシュケであった(637)。彼はしかしプシュケを見ると、すぐに父から聞いた妹が彼女であると同定する。プシュケという恋人がいながらダナエに心移してしまったアガトンの葛藤が、運命によっていとも簡単に解消されてしまう。このように事件に巻き込まれたり、離れ離れの親族と突如再会したりするなど、偶然が筋の展開のために必要不可欠の要素になっているので、バロック的だといえるのである。

ブランケンブルクは「叙事詩は、機械と名づけられているある種の奇跡を許容する。小説はおそらくそれに耐えられないだろう」と、小説に奇跡的なことWunderbaresはふさわしくなく、奇跡を描くならば、彼が「機械」と呼ぶ機械仕掛けの神が現れて物語が不自然になると主張している。これはアリストテレスが叙事詩と演劇について語ったことをそのまま引き継いでいる。このように理論においては不出来な小説の特徴として挙げられている機械仕掛けの神であるが、「われわれはそうこうするうちに、さまざまな理由から歴史的な真実に今回一度だけ暴力を振るい、そしてわれわれのアガトンを、機械仕掛けの神のようなものによって起こるかもしれないにしても、彼が実際に落ち込んだ危険から、彼がそれまで主張していたプラトニズムの名誉のために望みうるくらい無傷に引き出そうとしてしまったことを、隠しきれなくなってしまった」(163)と、ヴィーラントもこの作品の中に登場させている。たとえブランケンブルクがこの作品を高く評価したとしても、彼が求めたすべての理想を実現しているのではないのが実情なのである。『アガトン物語』においては、物語の筋が十分な理由や因果関係を提示されることなく、都合よく話が展開されている場合もある。『アガトン物語』は、必ずしも近代性と合理性のみで構成されているのではない。しかしむしろバロック的な語りを、近代的な娯楽小説へと延長させた点も評価の対象となってしまうべきであろう。

さらにこの小説が継承している前近代の小説の特徴として、主人公の成長を描くことが挙げられる。ヴィーラント自身が、この小説で主人公の成長を描くことに眼目を置いていることは、この小説の第一版の結末近くで、「編者は、主人公の若さと世間への初参入が大きな期待を抱かせ、主人公を試したり、清らかにしたり、ふさわしい強靱さにいたらせるのにさまざまな状況を充分経験させたのちに、最終的には、太陽の下で見たいと望むような、あるいは事柄の状況に応じて期待していたような、賢くて有徳の男を描くつもりであった」(513f.)と記述していることから明らかに見て取れる。^{xiii}最初は完璧な理想主義者でありかつ禁欲主義者だったアガトンが、小説の前半ではダナエとの性愛によって、後半ではシチリア島で怠惰で気まぐれな君主ディオニシウスのもとで賢人政治を目指すも、周囲の陰謀に敗れるという経験をとおして中庸の大切さを知るにいたる。主人公の成長は、ドイツではBildungsromanと言われる一連の近代的な小説の重要な特徴であるが、Bildungsroman的であれば近代的かというところではない。むしろこれはヴィーラント以前からドイツで小説の課題としてたびたび重視されてきた要素なのである。例えばゴットシェートの『文学批判試論 第四版』(1751)では、小説のみならず、戯曲であれ叙事詩であれ、文学全般が読者の教育を担うことによって存在が正当化されている。^{xiv}カントは、美は美そのものによって存在意義があると喝破したが、彼の影響を強く受けたジャン・パウルは、小説が教育的な手段として使われることに強く異を唱え、^{xv}それはただおもしろくあることに価値があるのだと主張した。^{xvi}小説が教育的であることに意義を見出そうとする態度は、この文学形式が後ろめたく感じられていた18世紀半ばの時代精神の遺産である。であるから、むしろBildungsroman理論は近代的な小説のタイプであるというより、それは前近代的な小説理論を継承し保持していると考えたほうがさまざまな事例に合致しうるのである。^{xvii}

『アガトン物語』は、主要なモチーフのパターンと作者の虚構性への態度から、革新的であるよりも伝統を継承している点のほうが多いといえる。しかし必ずしも旧来の特徴のみではなく、物語を進展させる語りの技法に新しい時代の小説像への揺らぎも見られる。

4. 新しい小説像への揺らぎ

小説の近代性は、第一にブランケンブルクが今後期待される新しい小説像の特徴の一つに挙げていた筋の合理的展開に認められるべきだということは先に述べたとおりである。そして第二に作者の意識の上で、作品の存在意義が社会的な教育ではなく、その芸術的価値にあることへの自負が根底になければならない。『アガトン物語』における唐突な展開の転換点となった箇所と読者への教育的な意図を指摘したので、この作品が前近代的な特質を持ち合わせていることを示せたと思う。しかしまた同時に、急な展開の合間の語りにおいては、近代性の萌芽を認めることもできるのである。たとえば、奴隷となったアガトンに彼の主人ヒッピアスがみずからの快樂主義を語って聞かせる場面は、小説理論の観点からすると、前近代と近代の混交によって構成されているといえる。前近代的要素としては、その教育的効果を期待している側面である。ヒッピアスがアガトンに空想癖を放棄させようとして、女性に表れた美をたとえにしなが、美は現実世界においてのみとらえられるべきだという意見を長々と語っているの、これは一義的にはアガトンにたいする思想教育の場面である。同時に、作品の読者にむけた哲学的思考への入門としてとらえることができる。少なくともレッシングが先の引用下線部②で指摘していたような、古典哲学をモチーフとした変奏の一部ともいえる。しかしまたこの教育的・哲学的議論の記述が、近代的な小説像の特徴を垣間見せてもいる。それは議論が長いために筋の急速な展開がひきとめられることと、一つの話題が詳細に扱われることで、写実的な描写によるにせよ、内面描写にせよ、状況を具体的に語る可能性が開けているのである。

哲学的な記述が写実や心理描写と結びついた場面の白眉は、ダナエの舞踊場面であろう。「彼女の演技全体がまったくアガトン独自の考えを表現していた。しかし優雅さと魅力が備わっていて、これについては彼の想像力も及んでいなかった。彼の魂がこの瞬間に襲われた感情はとても強烈だったので、このあまりにも魅力的な対象から目をそらそうとした。しかしそれさえできなかったのだ。逆らい難い力が目を引き戻してしまった。彼女の動きは、なんと高貴で、なんと美しかったことだろう」(131f.)と、ダナエの動作とそれがアガトンの心に引き起こした感情が、引用箇所に引き続き詳細に言語化されていく。客観的な観察と心理描写が関連付けられ、今後の展開に必然性を生み出していく技法は、先にあげたバロック的な御都合主義とは一線を画した近代的な要素である。両者の併存は、この作品が前近代から近代への移行期に創作されたからこその特徴であり、いずれも作品の独自性を構成する必要不可欠な要素である。

さらに小説の近代性を判断する第三の基準をブランケンブルクの提示した理想の小説像から抽出するとすれば、それは作者が彼自身の創作した虚構の世界をどのように認識し、位置づけていたかということが挙げられよう。虚構(フィクション) Fiktionという概念は17世紀フランスで誕生し、18世紀初頭にドイツに入ってきた。人々が現実とは異なる別世界の存在をおぼろげに感じつつも、それをことばで言い表して明確に認識するにいたるまでには長い期間を要したのだった。前近代の文学作品においては、作者は作品の虚構性を否定しようとしている。作者は自らの

作品が自身の想像力によって生み出されたことを知りながら、それを想像力の産物と認めることを拒否し続けたのである。あるいは、実際に見聞きしたことと、そこから発展させた独自のイメージを作り出しているみずからの頭の中を区別する意識が希薄だったフリードリヒ・シラーのような例もみられる。

ブランケンブルクは理想的な小説のあり方として、作者がみずから創造した世界を現実とは別の次元で把握する必要性を、「詩人は、名誉を汚されたくないならば、彼の登場人物たちの心の中を知らないなどと言いつくすることはできない。彼は創造主である。登場人物たちには彼らの全特性がそなわっており、彼らの存在全体は詩人によって保たれている。登場人物たちは詩人が整えた世界に住んでいるのである」²⁹⁾、と言いつくしている。ブランケンブルクは、小説家を何度も創造主Schöpferと呼んでいる。創造主は神の同義語である。彼にとって、小説家は作品世界における神なのである。それまで神は、現実の世界のみならず虚構の世界においても領域を侵犯されることのない絶対的な存在であった。だが近代社会においては、人間が現実とは別の虚構の世界は自分たちで支配できるという自信を持つようになつたのである。近代においては、虚構の世界は現実の世界への従属から解放され、その独自の世界を自由に展開させていくことになる。小説家が作品に日記や手紙、年代記からの抜粋、旅人からの伝聞などの体裁を装わせるのはよくあることである。たとえば『ドン・キホーテ』では、主人公たちの行動を直接見聞きして記述した書物が存在することになっている。彼の物語が空想の産物ではなく本当に起こった出来事だという体裁をつくらせることは、前近代では本当らしさWahrscheinlichkeitのためであったかもしれない。作品が事実であると訴えることは、虚構を構築することへのやましさを発露した側面がある。やましさをゆえの言いつくであり、虚構を否定した前近代的精神の名残である。フィクションも現実に従属していた18世紀半ばまでは、フィクション世界に現実と同じ基準が当てはめられた。フィクションを想定することそのものがやましさを抱かせた。なぜならば、それは、神が支配する現実の世界への挑戦だからである。少なくとも小説を読むことは、空想の絵空事に時間を無駄に費やすことだという道徳的な非難の対象であった。しかし近代では、これらの本当らしさのための体裁が逆にフィクションらしさを強調し、フィクションという形式を成立させるためのレトリックになりかかっている。小説がフィクションであることが自明であるようになった近代では、フィクションらしさの体裁も不要となりこの形式をとらない場合があるが、近代のみならず現代においても、本当らしさの強調はかえってフィクションの形式を際立たせる結果となるのである。

『アガトン物語』においては冒頭で話の底本になつたとされるギリシャの手記について言及されるのであるが、「みなさんの目の前にある物語の編者は、このお話を本当に古代ギリシャの手記から引いてきたのだということを読者の皆さんに説得するのは、あまりにも本当らしくないしおかしな感じがする。せいぜいできそうなことは、この点に関してぜんぜん言わずにおいて、読者のお好きなように考えることをお任せすることである」(11)と、あいまいな言い方がなされている。自信がないのであれば、手記という物語を複雑にする仕組みを回避することもできたかもしれないのだから、この形式はあえて踏襲されているといえるのである。実際に彼が行っている語りは、虚構を意識しており、複雑化した近代的な精神の産物であるといえる。さらにヴィーラントは古代ギリシャ時代の手稿編者に、「やれやれ(と、ここでギリシャの手稿の著者は突然気が軽くなって叫び声を上げた)、やれやれ、われらが主人公を真面目な男が陥りうる最悪の場所の危険から思いつく救いだせたものだ。ほとんど信じられないことに、彼の徳もそっくり持ち出せたのだ」

(492) という独白をさせている。この手稿編者は、本当らしさを強調させるはずが、かえってそれは作者が創作した詩的世界の登場人物の一人となり、虚構の構成を担っている。ヴィーラントは、本当らしさを語ることを、逆に虚構性を際立たせるという技法に転化しているのである。彼はさらに18世紀の語り手しか知りえない情報を幾度となく提示することで、作品世界を虚構の領域にはっきりと位置づけている。

何度も賞賛されている小説じみた道徳の教師たちが高慢の弾みで作り出したあらゆる超自然的な登場人物たちのなかには、勇気や、勇敢さ、恋の貞節でみせる英雄行為をおこなっている時ほど幸福でない者はいない。そういうわけで、われわれには善良な司教ヘリオドスの時代からわれわれの時代まで、恋愛物語や騎士読本、小説があるのだが、情熱からでた強い願望やもっとも気にとめている関心ごとさえおたがいにすべてを犠牲にする恋人たちや、世界のあらゆる巨人や怪物と格闘して、いつでも最初に出会った王女の気に入る気満々の騎士たち、そして(クレピリオンにいたるまで、ライン河の向こう側のわれわれの隣人たちの間で怠惰な流行をもたらした) 恋人の名前を木に彫るために世界を放浪している以外に能がなく、たまに出くわすきわめて魅惑的な試練でも彼らの貞節を一瞬も揺るがすことがない情夫だけで埋め尽くされている。(161f.)

ここにあげた箇所は、小説はどんなふうに出時代の社会で一般に理解されているかについて記述されており、小説一般にたいするパロディーとして読むことができる。ここでヴィーラントは、あえて筋を逸脱させつつ、読者にたいして小説独特の不自然さを指摘し、それを非難しているかのようでもある。しかし彼があくまで小説という形式を選択したことからもわかるように、さまざまな矛盾点を列挙しつつも、単純に批判をしているわけではないことは、次のような場面からもうかがい知ることができる。アガトンとプシュケが盗賊団によって奴隷にされたところで偶然再会したおり、二人は再会を喜び、お互いにどのような経験をしてきたのかを語り合う。しかし、いざ逃げ出す方法を考えなくてはならないと思いついたときには時すでに遅く、雑談のせいで時宜を逸してしまったことを悔やむ。

今や彼ら [=アガトンとプシュケ] は、自分たちが小説の中の恋人たちの例にならって、絶好の機会を不必要なおしゃべりで失ってしまったと悲嘆にくれた。というのも、彼らは将来じっくり話す機会がもうないだろうと予測がついたからだ。(36)

「小説の中の恋人たちにならって」という部分は、当時の小説一般にたいする当てこすりとして読むことができる。多くの小説作品において、登場人物たちが非合理的に行動してせっかくの好機を潰し、危険からのがれようとするどころか、かえって誤った方向に進んでいく場合が多いとヴィーラントが認識していたことが伺える。彼は小説のこのような慣習的におこなわれる不自然な筋の展開をあえて取り込み、小説の慣例であると断りをつけることで、『アガトン物語』に近代的小説のパロディーを盛り込んでいるのである。しかしそこには非難の響きはなく、空想領域の矛盾さえも愉悅をもって受け入れる自由な精神が垣間見えている。作品中の語りは、現実の世界と虚構の世界の間を自由に行き来するだけでなく、虚構をこえてさらにメタフィクションの次元へと自在に達しているのである。

『アガトン物語』を分析して言えることは、この小説が過去の伝統の断絶ではなく、むしろ過去の作品群の継続だということである。だが単純に延長させたのではなく、過去の小説群の特徴をパロディー化することによって客観視し、作品の語り視点により高い視点を含ませることに成功している。『アガトン物語』は、過去の通俗的な作品の蓄積の上に築かれたある種の集大成とすることができるであろう。ヴィーラントは彼以前の作品を批判しているのではなく、自らの小説に滑稽化し、諷刺しつつ積極的に採用することで、彼以前の非合理的な筋を有する小説の伝統を近代へと延長させているのである。ありがちな不自然さなどをあえて取り込むことで、フィクションはメタフィクションへと達し、作者の意識の深まりは、作品世界の豊穡さへとつながっているのである。小説を近代的規範による完成度で分別し、優劣のふるいにかけ、多くの作品を歯牙にもかけない態度は改められるべきであろう。過去の小説像を完成させつつ、その中に合理的な筋の展開などを徐々に加えることで新しい時代に向けた一歩踏み出している。過去と未来の混交が『アガトン物語』という小説の最大の魅力である。

※本論は2008年3月31日大阪市立大学ドイツ文学会第39回研究発表会（於大阪市立大学）における口頭発表「『アガトン物語』論 交錯する前近代と近代の小説像」をもとに、一部を大幅に書き改めたものである。

-
- i 研究に用いたのは以下の版である。Christoph Martin Wieland, *Wieland Werke in zwölf Bänden*. Hrsg. v. Gonthier-Louis Fink u. a. Bd. 3, *Geschichte des Agathon*. Erste Fassung von 1766/1767. Mit einer synoptischen Übersicht über die Kapitelfolge der ersten und der letzten Fassung sowie den Zusätzen und Ergänzungen von 1773, 1794 und 1800. Hrsg. v. Klaus Manger. Frankfurt a. M. 1986. 引用に際しては、カッコ内に頁数を明記する。
 - ii Vgl. Jürgen Jacobs, *Die Theorie und ihr Exempel. Zur Deutung von Wielands "Agathon" in Blanckenburgs "Versuch über den Roman"*. In: *Germanisch-Romanische Monatsschrift* 31 (1981), S. 32-42.
 - iii Vgl. Manfred Beetz, *Wunschdenken und Realitätsprinzip. Zur Vorurteilsanalyse in Wielands Agathon*. In: Jörg Garber(Hrsg.), *Zwischen Empirisierung und Konstruktionsleistung. Anthologopologie im 18. Jahrhundert*. Tübingen 2004, S. 263-286. Gregor Thuswaldner, *Verbotene Liebe: Inzest, Narzißmus und Homoelotik in Wielands 'Geschichte des Agathon'*. In: *Literatur in Wissenschaft und Unterricht*. 34(2001) H.4, S. 307-319. Lieselotte E. Kurth-Voigt, *Wielands "Geschichte des Agaton": Zur journalistischen Rezeption des Romans in England*. In: *Wieland Studien* 2 (1994), S. 54-96. Hans-Jürgen Schigs, *Agathon - Anton Reiser - Wilhelm Meister. Zur Pathogenese des modernen Subjekts im Bildungsroman*. In: Wolfgang Wittkowski (Hrsg.), *Goethe im Kontext. Ein Symposium. Tübinten 1984*, S. 43-68.
 - iv Vgl. Klaus Schaefer, *Christoph Martin Wieland*. Stuttgart, Weimar 1996 (= *Sammlung Metzler*; Bd. 295) Liisa Saariluoma, *Erzählstruktur und Bildungsroman. Wielands "Geschichte des Agathon", Goethes "Wilhelm Meisters Lehrjahre"*. Würzburg 2004.
 - v Gotthold Ephraim Lessing, *Werke und Briefe in zwölf Bänden*. Hrsg. v. Wilfried Barner. Frankfurt am Main 1985, Bd. 6, S. 530f.
 - vi 実際に『アガトン物語』第一版は発刊当時チューリヒとウィーンで検閲により禁止図書となった。
 - vii Vgl. Friedrich von Blanckenburg, *Versuch über den Roman*. Faksimiledruck der Originalausgabe von 1774. Mit einem Nachwort von Eberhard Lämmert. Stuttgart 1965, S. VIII.

- viii Ebd., S. 440.
- ix Ebd., S. 20.
- x レッシングの『アガトン物語』評は、その後のドイツにおける受容に大きな影響をあたえている。それに加えて、これがイギリスにおけるこの作品の受容と評価の確立に大きな影響を与えたことは、以下の論文で詳細に検討されている。Vgl. Lieselotte E. Kurth-Voigt, a. a. O.
- xi Wolfgang Preisendanz, Die Auseinandersetzung mit dem Nachahmungsprinzip in Deutschland und die besondere Rolle der Romane Wielands (Don Sylvio, Agathon). In: H. R. Jauß (Hrsg.), Nachahmung und Illusion. Kolloquium Gießen Juni 1963. Vorlagen und Verhandlungen. München 1969, S. 93.
- xii F. v. Blanckenburg, a. a. O., S. 22.
- xiii これ以外にも、ヴィーラントが『アガトン物語』において、人物の成長を小説に描くべきだと表明している箇所は多い。そのうち2例を挙げておきたい。「すなわち、われわれの物語の主人公は、われわれが彼に与えた変化と弱さによってたしかに主人公らしくないと言うしかないが、しかしその分人間であって、だからより一層経験とその間違いによってさえも、われわれに教訓を与えるのにふさわしいのである」(163)。「道徳的な小説には、いつでも同じままで、それゆえに賞賛される主人公がいるのも認めはするが、[...]しかし人生においてはこうはいかないといえる。いつも同じままでいる人には、悪いことばかりなのだ——愚者や徳のない人間のことを言っているのではない。——非常に素晴らしい人は、自分たちの考えや判断、感情、そして彼らがすぐれている心や徳においても、限りなく変化し続けているのだ」(436)。
- xiv Vgl. Johann Christoph Gottsched, Versuch einer critischen Dichtkunst. Unveränderter photomechanischer Nachdruck der 4., vermehrten Auflage, Leipzig 1751. Darmstadt 1962, S.126ff., 167, 313ff.
- xv Vgl.小説が教育目的にされることに異を唱えた箇所: Jean Paul, Vorschule der Ästhetik. In: Jean Pauls Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Erste Abteilung. Elfter Band, S. 26.
- xvi Ebd., S. 107
- xvii この点について異論が多いことは承知しているが、執筆者の仮説は、Bildungsromanは18世紀一般の小説理論が、小説の一ジャンルに縮小することで近代小説に引き継がれたとするものである。この点については今後も研究を重ねていきたい。
- xviii F. v. Blanckenbrug, a. a. O, S. 264f.